

## 審査の結果の要旨

氏名 本田 由紀

日本の教育の特徴はどこにあるのか。この問題に答える上で、教育そのものに目を向けるだけでなく、教育システムと他の社会システムとの関係に注目し、関係のあり方を変化を含めて他の国々と比較する視点が有効である。本論文は、教育システムと職業システムの関係に着目し、教育から職業への「トランジション（移行）」と、両システム間の質的な関連性を捉える「レリバンス」という二つのテーマを設定し、日本の教育システムの特徴を明らかにする。

第 I 部では本論文の理論的枠組みが構成される。システム間関係に着目する理論として N・ルーマンの社会システム理論を中心に検討し、その有効性が示される（1章）。この枠組みを用いて、教育システムと職業システムの関係に注目すること、具体的には教育から職業への「トランジション」と、教育と職業の「レリバンス（内容的・質的な関連性）」をテーマに設定することの重要性と有効性が指摘される。

第 II 部（トランジションの実証研究）では、まず戦後日本におけるトランジションの慣行がいかに形成されたのかが分析され、高度成長期の労働需要の急速な拡大と新規学卒市場の成立の同時性という現象の重要性が明らかにされる（3章）。つぎに、この時期にブルーカラーの学歴上昇が職業システム内部で潜在的なコンフリクトを生み出したことを明らかにした上で（4章）、90年代に入り、学校と企業との「実績関係」に変容が生じたことが示され（5章）、教育システムと職業システムの齟齬の具体例として「フリーター」の析出メカニズムが解明される（6章）。これらを通じて、職業システムの急速な変化と多様化に教育システムが対応できなくなったことが描出される。

第 III 部（レリバンスの実証研究）では、レリバンスに関する先行研究の検討（7章）を経て、学習内容が職業生活において意味をもつかどうかに関する「主観的な職業的レリバンス」の分析（8章）、職業的自立性の形成に寄与しているかに関する「客観的な職業レリバンス」の分析（9章）を通じて、これら二つの面で日本では大学教育のレリバンスが著しく低いことが明らかにされる。最後に、これらの結果をもとに、高度成長期に「偶発的」に形成された教育システムと職業システムのシステム間関係が、現在、トランジションとレリバンスの両面において齟齬をきたしていることが結論としてまとめられ、その理論的・政策的インプリケーションが論じられる（10章）。

以上のように本論文は、日本の教育の特徴を、教育と職業のシステム間関係の変化としてとらえ、それが現代日本における様々な教育問題を引き起こしていることを実証的に解明すると同時に、それを社会システム論的に解釈した点に意義がある。この知見は、現代日本の教育と職業の関係の理解にとどまらず、教育の特徴をシステム間関係として理解するという理論的可能性を広げた点において、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。このような点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。